

特集に当って

日下 泰夫

高齢化社会、情報化社会の進展にともない、生涯教育や余暇活動の活発化、価値観の多様化、経営の情報化、産業構造の変化、情報都市の出現など、わが国の社会はかつてなかったような多様な変化に遭遇している。こうした変化は従来と比較にならないほど急速に進行し社会に大きなインパクトを与えており、変化を的確に把握し変化にどのように対応するかは、個人、組織、国家を問わずますます重要となりつつある。こうした変化の激しさに思い至るとき、われわれにとって「時間」という動態的概念が限りある資源として貴重な意味をもっていることに気づくであろう。

およそ、命あるものの一生を「寿命」として捉えるとき、そこには意識的にせよ無意識的（本能的）にせよ、時間の経過の諸段階に応じてさまざまな活動が繰り返されている。こうした活動を観察することによって、変化の様相や変化に適応する行動の特性を、とりわけ、対象領域の違いを超えた共通の特性を、多少なりとも浮き彫りにできるのではなかろうか。

以上のような理由から、「ライフサイクル」というテーマで特集号を企画してみた。

ライフサイクルという言葉には、「生きものが生まれ、成長し、老化し、死に至るまでの全生涯」と「世代の交代を通じて行動が次世代に受け継がれる循環」という響きが感じられる。こうした側面は、人間を含む生物だけにあてはまるものではなく、人間が創造し寿命という言葉が使用されるような「もの」にまで広範におよんでいる。それゆえ、特集のテーマも多方面にわたった。特定の手法や問題を扱ったこれまでの特集を「ORという布地」を編み出す「タテ糸」と「ヨコ糸」にたとえるなら、本特集はさしずめこれらの糸と別の方向から絡み合う「第3の糸」とでも呼べるであろうか。

くさか やすお 東京都立商科短期大学
〒104 中央区晴海1-2-1

さて、本特集号の最初で、宇尾氏は、生きものそれ自体について、外界の周期と適応した周期性を長い進化の歴史の中で発展させていった事実を、「生物時計」という点から種々の例を挙げながら紹介している。

花田氏は、人口集団の死亡の分析の基本手法である生命表の概要を示し、その応用として、出生、結婚、離婚、死亡等の人生の出来事を考慮した多相生命表が人間のライフサイクルを把握する重要な方法であることを実データを用いて示している。信頼性や確率過程に興味をもたれている方は親しみを覚えるであろう。

西江、福岡氏は、鉄道システムのハードな側面について、設備投資と保全に多額の費用を要するシステムの特性に鑑み、設備の設計、運用、保全、廃却までを一貫して把握するライフサイクル・コストの重要性とその適用例を、さらに、保全とその基礎となる信頼性解析の実態を紹介している。

西山氏は、ソフトなシステムとしての企業のライフサイクルを進化理論の観点から定式化し、そのシミュレーション結果を示している。さらに、企業の延命のための商品開発戦略を生きものの適応戦略との類推から論じている。

疋田氏は、企業経営のきわめて重要な機能としてのマーケティングのライフサイクル論について、製品ライフサイクル理論の概要とライフサイクルの特定段階に応じてとられるマーケティング戦略の活用例を紹介し、この理論の利点とフロンティアを指摘している。

最後に、月尾氏は、技術の集積によって構成された人工の環境としての都市について、そのライフサイクルが都市の成立基盤である輸送技術、エネルギー技術、情報技術のライフサイクルによって影響されること、さらにこうした技術のライフサイクルが集積の利益と損失によって影響されることを、具体的な事例を挙げながら論じている。

本特集号が激動の時代を生きていくための、また、OR自体がそのライフサイクルを限りなく延ばしていくうえでの示唆を与えうるとしたならば幸いである。

最後に、特集を企画するに当って、学会員、非学会員を問わず多くの分野の方々からご助言をいただきました。紙面の都合上、個々のお名前を列挙できませんので、まとめてお礼を述べさせていただきます。